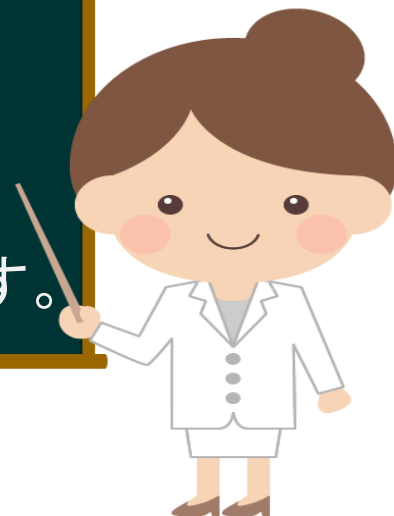


今回は、

「ワクチン」

のお話です。



皆さまこんにちは！

そろそろ「インフルエンザ」や「新型コロナ

ウィルス」の「流行」というキーワードをよ

く耳にされることが多くなったと思います。

今回はその中でも、ワクチンについてお伝えさせていただきます。

ワクチンの始まりをご存じですか？

ワクチンの始まりは、1796年にイギリスの医師エドワード・ジェンナーが天然痘を予防するために開発した「種痘」からはじまります。

その後狂犬病の病原体を弱毒化させたワクチンを開発したのがフランスのパスツールという細菌学者でした。

日本では1890年に北里柴三郎が抗毒素の発見をしたことで医学界に進化を遂げてきました。

ワクチンを発見しても実用化まで実に100年以上かかったことがわかります。

そもそもワクチンとはなんなのでしょうか？

私たちのからだには、一度入ってきた病原体が再び体の中に入っても病気にならないようにすることが出来るようになっていきます。

この仕組みを「免疫」と言います。

この「仕組み」を利用したのがワクチンとなります。

ワクチンにもいくつか種類があります。

- 1) 生ワクチン
- 2) 不活化ワクチン
- 3) トキソイド
- 4) メッセンジャーRNA ワクチン
- 5) ウィルスベクターワクチン
- 6) 組み換え蛋白ワクチン

となっています。

私達がよく聞くワクチンに、「生ワクチン」と「不活化ワクチン」というのがありますので、それを中心にお伝えします。



1) 生ワクチン

生きたウイルスや細菌の病原性(毒性)を、症状がでないように限りなく弱くした製剤(病原体をそのまま使用する)をさします。

弱毒化されてはいますが、病原体なので、それが体内で増殖すると、ワクチン接種後しばらくして



発熱や発疹などの症状がでる場合があります。ワクチンの効果が得られやすい特徴を持ちます。

代表的なもの……

＊MR(麻疹風疹混合)、麻疹、風疹、水ぼうそう、結核、おたふくかぜ、などです。

2) 不活化ワクチン

ウイルスや細菌の毒性をなくし、感染する力を失わせたもの。

生ワクチンのように体内でウイルスや細菌が増えることがなく、1回の接種では十分な免疫がでないため、複数回の接種を受ける必要があることが特徴となります。

代表的なもの……

＊5種混合(D:ジフテリア・P:百日せき・T:破傷風・IPV:不活化ポリオ・ヒブ:Hib 感染症)、DT二種混合(D:ジフテリア・T:破傷風)、日本脳炎、インフルエンザ、A型肝炎、B型肝炎、肺炎球菌、不活化ポリオ などです。

ワクチンには「定期接種」と「任意接種」があります。

定期接種は国が推奨する予防接種となり、決められた期間に接種すれば自己負担なく接種できます。

任意接種は文字通り接種する、しない、を自身で選択できます。

保険適応外のため、原則自己負担となっています。

最後に、インフルエンザワクチンは「生ワクチン」と「不活化ワクチン」どちらでしょうか？



注射ではなく、

答えは、両方あります。

従来のインフルエンザワクチンは注射型となっています。こちらは「不活化ワクチン」です。

新しく、「生ワクチン型」として

鼻腔から接種する「経鼻生インフルエンザワクチン」もあります。

生ワクチン、不活化ワクチン、その他のワクチンを接種することで「発症予防」と「重症化予防」に繋がりますが、同時に「副反応」についても留意してください。

日頃から信頼できる医療機関や医療職と繋がっておくこと、情報を取った時は「出所」や「根拠」などを確認されると良いかもしれません。



次回は
何でしょう

